



# ほっとほっとタイムズ—第2号—

2024.6.20

井荻小学校 特別支援教育校内委員

今年もまた、暑い夏がやってきます。今週から水泳の授業も始まりました。皆様、いかがお過ごしですか。

今回は子どもたちの社会性の育ちについて考えてみたいと思います。以前、私が読んだ本に、社会性(役割取得能力)の発達段階を5段階に分けて書いてありました。簡単に紹介するとー。

- レベル0:自己中心的役割取得(3~5歳)
- レベル1:主観的役割取得(6~7歳)
- レベル2:二人称相応的役割取得(8~11歳)
- レベル3:三人称的役割取得(12~14歳)
- レベル4:一般化された他者としての役割取得(15~18歳)

言葉だけではわかりづらいですが、つまり、かくれんぼをしていてカーテンなどに隠れて自分から相手が見えない状態だと、たとえ足が見えていても相手も見えてないと思うのが3歳、自分は見えていなくても足が出ていれば相手は見えているだろうと考えることができるようになるのが低学年、高校生くらいになると見えない場所の人のことも考えられるようになるといった感じです。このように、社会性は年代を追って発達するのですが、自然に人の気持ちを考えられるようになるのではなく、後天的に学んでいって初めてできるようになるというのです。

そのことを思うあまり、失敗したことがあります。子どもに社会性を教えるのは親の役目と思い過ぎ、子どもの状態も気持ちも考えないで親の価値観をやみくもに押し付け、子どもの心を固くしてしまった経験があります。正しい社会性を教えることは必要ですが、親の価値観をただ押し付けても子どもは育たないのです。

学校にかかわる心理士の方から言われた言葉で忘れられない言葉があります。「暴力をふるう子どもがいたら、その子本人が暴力をふるわれていると考えたほうがいい。子どもはどこかで学ばない限り暴力はふるわない」と。ショックな言葉でしたが、なるほどとも思いました。直接自分が経験しなくても、最近はゲームやネットの世界には子どもに教えたくない言動があふれかえっており、大人の知らないところで山ほど学んでいるのが現状ではないでしょうか。

そしてもう1つ。これは少年犯罪の子どもたちの更生にかかわった方が書かれた本に出ていたのですが、更生施設にきたばかりの子どもたちはすぐ「死ね」という。そこで、自分の怒りは本当に人を殺したいほどなのか、いやいやちょっとイラっとする程度だったのか、いろいろする気持ちを表す言葉をたくさん学び、その時その時の自分の気持ちはどの言葉に一番ぴったりくるかということを考える訓練をたくさん積んだところ、落ち着いた生活ができるようになったそうです。

これらのことから言えることは2つ。①社会性は後天的に獲得していくもの。育てなければ育たない。間違っただ学習をすると間違っただ行動をとるようになる。今、子どもは何を学んでいるか常に気を付けておくことが必要。②自分の気持ちを正確に自覚できることが大切。そのためにはたくさんの言葉を知ることが大事で、言葉を使って自分の気持ちをきちんと表現できることが気持ちの安定につながる。

現代社会は子どもが社会性を学ぶ上では本当に学びにくい世の中になっているとつくづく思います。以前ですと家族も多く、お互いのかかわりを見ながら学ぶことも多かったと思いますが、今は家族の人数も少なく、その上、大人が忙しく会話の機会も減っています。その上、近所づきあいも減って地域の中にゆっくり子どもの成長を見守る雰囲気もなくなってきています。そして子どもたちは生身の人間と触れ合うのではなく、機械を相手に遊ぶことが多くなっています。機械は「痛い」とも「嫌だ」とも言うてくれません。また、ゲームの世界は戦いがほとんどで、「死ね」だの「殺す」だのと言った現実世界では口にはしてはいけないような言葉があふれています。いったい、私たちに何ができるのでしょうか。

まずは「会話」かなと思います。できるだけ子どもから言葉を引き出してやること。会話したくなるような環境を作ってやってください。うれしい気持ちも悔しい気持ちもできるだけ自分の気持ちで語らせてください。そうすることで語彙も増え、共感してもらえば心の安定感も出てくると思います。

そして、次はゲームやネットの使い方です。まだまだ社会性の発達途上にある子どもたちです。任せてしまわないで、必ず大人がチェックしてください。できることならある程度の制限をかけ、本に親しむ時間が欲しいです。本は言葉の海です。読書によって、たくさんの言葉、感情を学んでくれることは間違いありません。

そして何より、**子どもに寄り添うこと**です。学校では、力で抑える指導は極力しないように努力しています。力で抑えると力で反発してくるようになります。失敗してしまった子どもは必ずと言っていいほど、失敗した自分に傷ついています。その思いに寄り添って過ちを繰り返さないための方法を一緒に考えていきます。周りの大人たちはあなたの応援団だとわかってもらえると嬉しいのです。このことは大人であっても同じですね。お互いをまずは信頼し、お互い寄り添いながら子どもたちのために頑張れると嬉しいなと思っています。

